



新 世 界 社

アマゾン童話シリーズ④

アルファ牛のひみつ

ルイス・ジャルディン作 ダルラン・A・ローザ画

新 世 界 社

アマゾン童話シリーズ④

アルア牛のひみ

ルイス・ジャルディン作　ダルラン・A・ローザ画



アマゾン童話シリーズ④

アルア牛の

ひみつ

作

ルイス・ジャルディン

画

ダルラン・ローザ

発行日

一九七九年五月二五日 第一刷

発行所

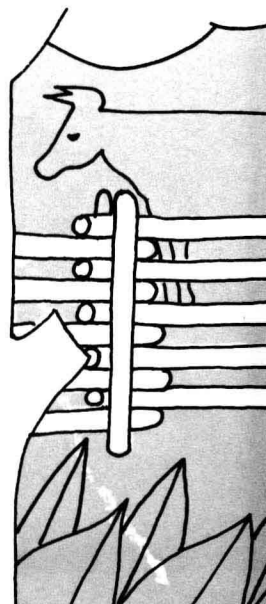
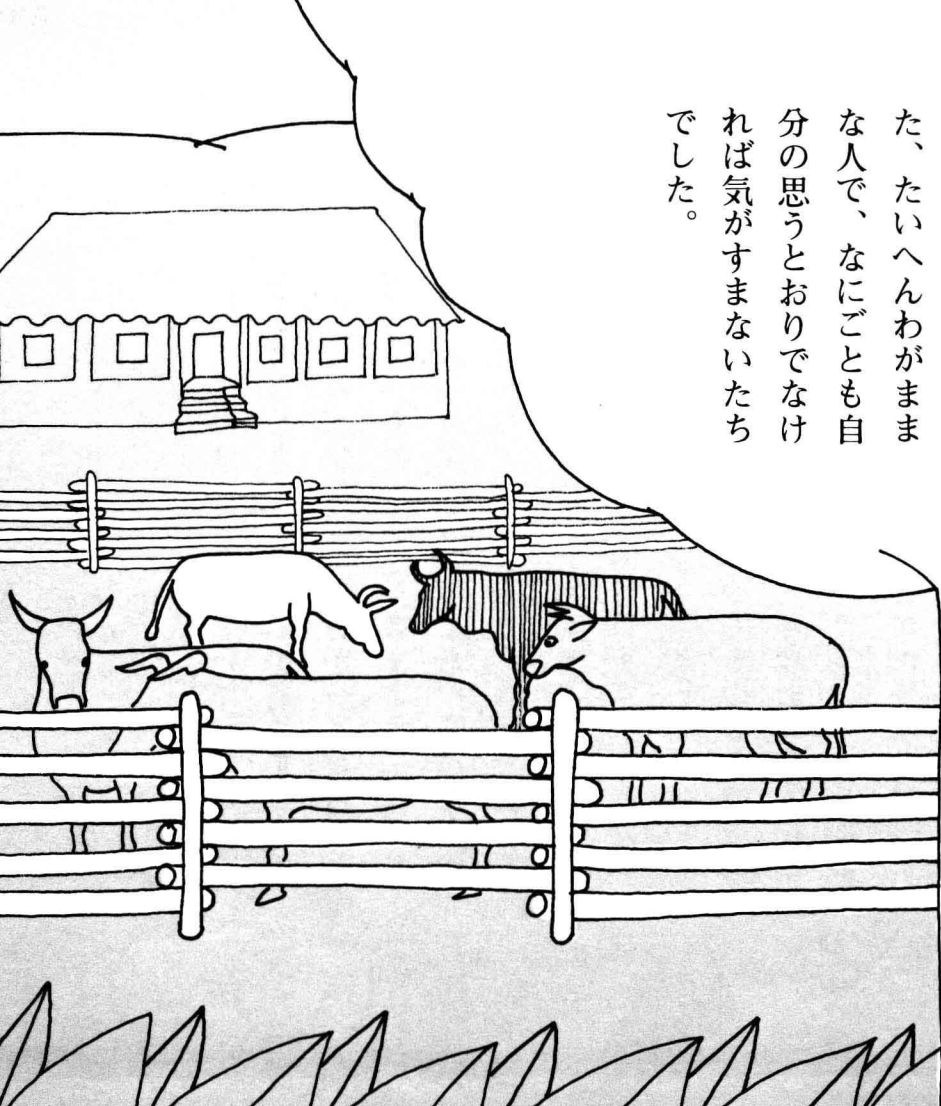
株式会社 新世界研究所(新世界社)

東京都練馬区石神井町六ノ二七ノ二九

電話 東京 (03)九九五一八八七一

印刷製本 三美印刷株式会社

むかしむかし、山を
いくつもこえたその奥
に、たいそうりっぱな
農園のうえんがありました。と
ころが、ここのだんな
さんというのが、金持
ちであるのを鼻にかけ
た、たいへんわがまま
な人で、なにごともし
自分の思うとおりでな
ければ気がすまないた
ちでした。



いつも、いばりくさっていて、ひとの言うことなどきいたためしがありません。なにしろ、世の中で自分が一番えらいと思っていたのです。神さまさえ、信用しないというような人でした。こんなふうでしたから、おくさんも、農園で働いているたぐさんの人たちも、このだんなさんには、ほとほと困りはてていました。

そんなある日の夕方、思いがけないことがおこりました。やしきの前の空地にどこからともなく、大きな大きなアルファ牛があらわれたのです。このふしぎなできごとで、まず、さわぎたてたのは、この家の犬たちでした。突然、見たこともないような大きな牛が目の前にあらわれたものですから、ワンワン、キャンキャン、それはもう、たいへんないきおいでほえつきました。

次に、このさわぎを
ききつけて、使用人た
ちがあつまってきた。
そのころにはもう
犬たちが、牛をおいか
けて、ひどいすなぼこ
りをあげていました。
そして、最後^{さいご}に、だ
んなさんが家の中から
出てきました。
「いったい、なんのさ
わぎだ。」



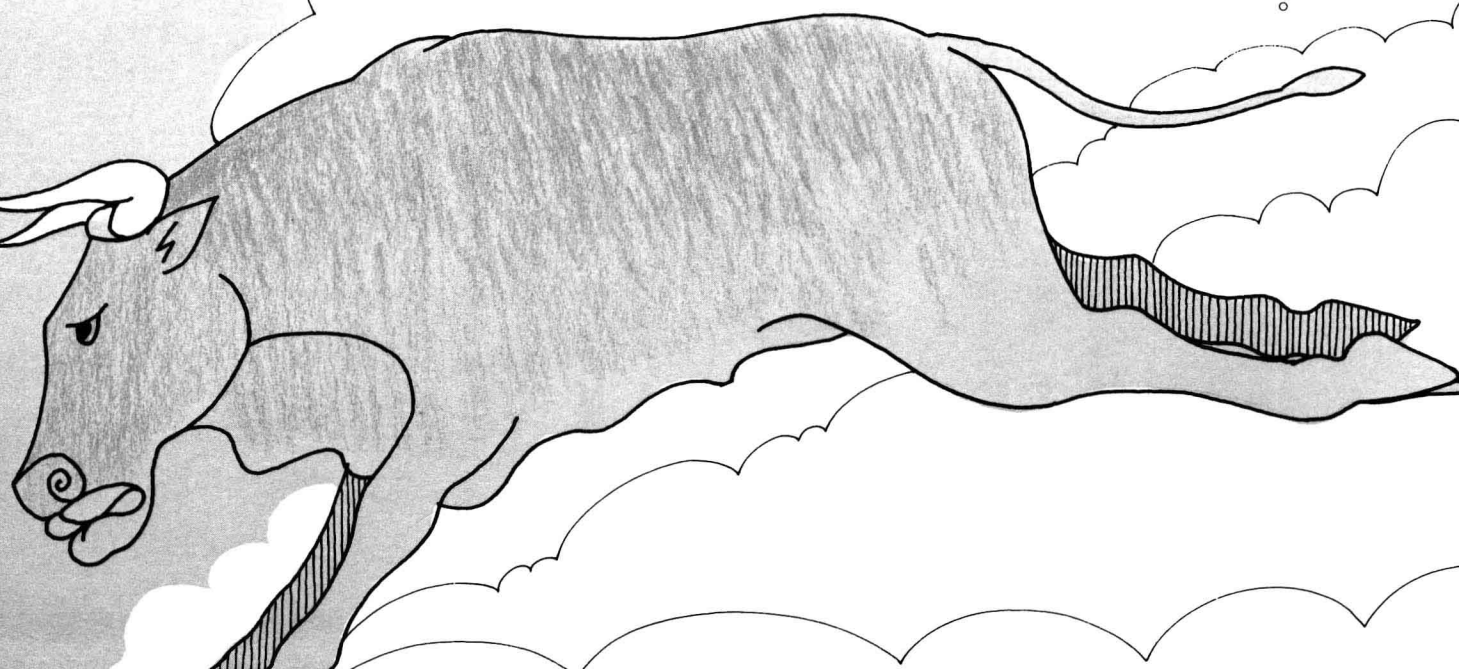
ぷりぷりしながら、ひょいと前を見ただんなさんのおどろいたこと。

「な、なんだ。あの牛は。」

あの牛がどこから来たのか、いったいだれの牛なのか、だれにきいても、みな、首をかしげるばかりです。どうしたものか、と、だんなさんがうでぐみをしながら考えていますと、ふいに、牛は向きをかえて、ドウッ、ドウッという、ものすごい音をたてて、どこかへ走り去ってしまいました。ふしぎなことに、この牛は、七日の間、同じ場所、同じ時間にきまってあらわれました。最初の日とまったく同じように、犬がワンワンほえて、牛と犬のおいかけっこがはじまって、すなほこりがあるもうとたちこめて、みんながあっけにとられているうちに、牛はどこかへ走り去る。毎日、これのくりかえしでした。

ついに七日めの夜、だんなさんは、あの牛

をなんとかしてもつかま
えようと決心しました。
こう毎日、すなぼりを
をたてられたり、家の
前をふみあらされたり
では、たまりません。
それに、このわしにつ
かまえられぬはずはな
い、というごうまんな
気持ちもありました。
よく日、だんなさん
が家の前で待っている



と、やはり、同じ時間に牛はあらわれま
した。だんなさんは、すぐチューバとい
う召使いをよんで、言いました。

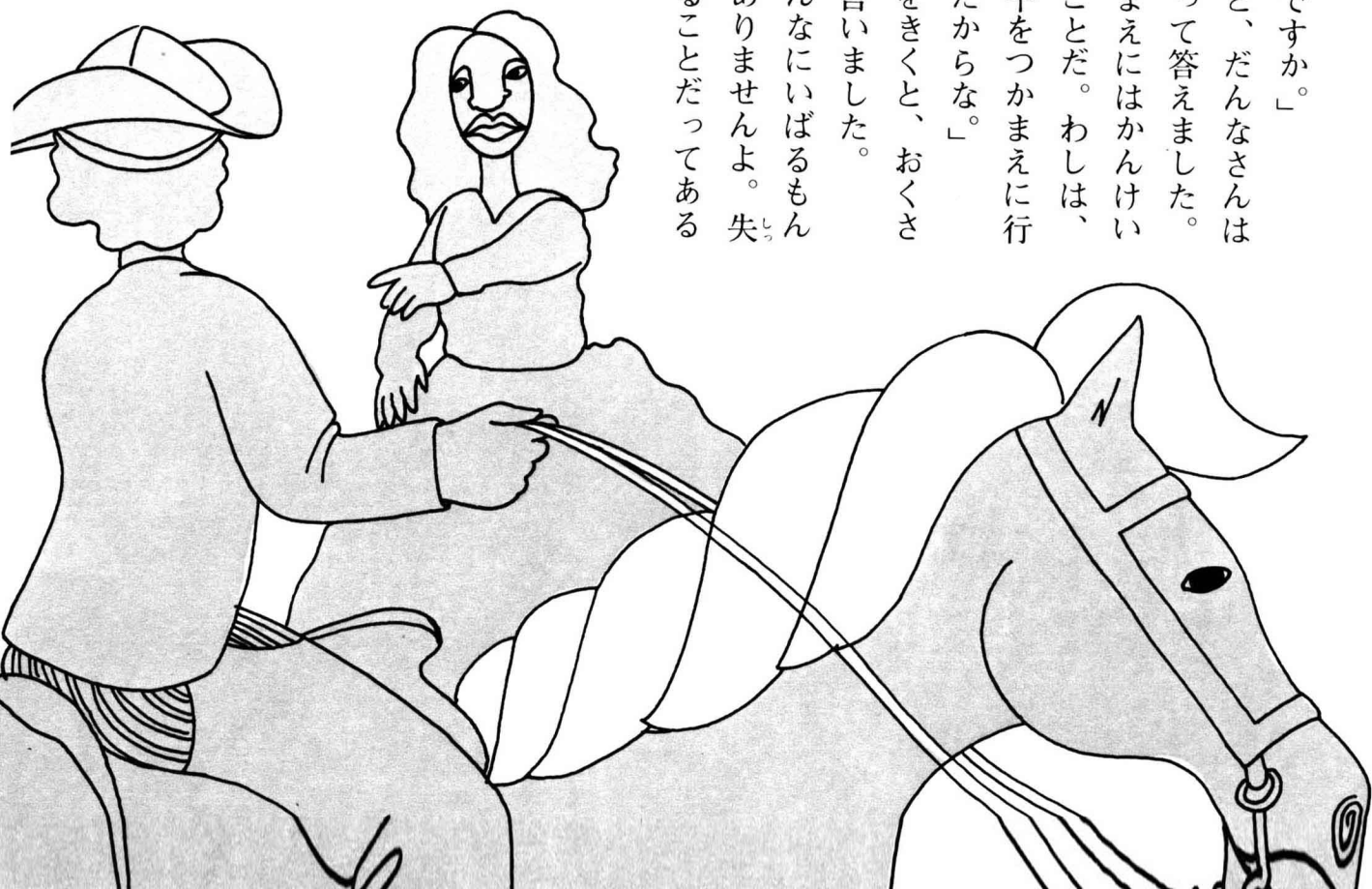
「早くボアドールをつれてこい。」

ボアドールというのは、だんなさんのご
じまんの馬でした。みごとに毛なみで、
その地方一、足が速いというひょうばん
でした。だんなさんは、そのボアドール
に銀のあぶみとくらをつけました。銀で
かざられたボアドールはますますりっぱ
に見えました。今まで、その馬に乗って、
つかまえられなかった牛は、一頭もあり
ません。

だんなさんは、すぐにボアドールに乗
っておいかけていこうとしました。する
と、そこへ、おくさんがもの音をききつ
けて、家の中から出てきました。

「あなた、そんなにあわてて、どこへ行

くんですか。」
すると、だんなさんは
いばって答えました。
「おまえにはかんけい
ないことだ。わしは、
あの牛をつかまえに行
くんだからな。」
それをきくと、おくさ
んは言いました。
「そんなにいばるもん
じゃありませんよ。失
敗することだってある



んですからね。すべては神さまのおぼしめし
なのですよ。」

ところが、だんなさんは、ますますいばって
言いました。

「神さまがどう思おうが、わしはかならずつ
かまえてくるんだ。」

そうして、馬に乗りました。馬はすぐ牛をお
いかけ始めました。そうして、あつという間
に、牛とだんなさんに乗せた馬は、とおくへ
姿をけしてしまいました。だんなさんは牛を
おいかけて、さぼてんのたくさんはえている
荒れ地や石がごつごつしているとところを通り
ました。しげみやさくをとびこえたり山をの
ぼったりおりたり、細い道を通りぬけたり。
ところがどんなにいっしょうけんめい走って
も牛においつくことができません。だんなさ
んはやっきなうって馬にむちをあてました。

そのうちに、牛は、高い木のおいしげって

いるジャングルへ入っ
ていきました。だんな
さんに乗せた馬もあと
を追^おってジャングルの
中へ入りました。ひと
すじの光も通さない、
まっ暗^{くら}やみでした。だ
んなさんは、こわくて、
むちゅうで馬にしがみ
ついていました。

しばらくすると、急
に明るくなって、目の



前がひらけました。ところが、ほつとしたのもつかの間、走っていく牛の前の方におそろしいぜっぺきが見えました。あんなところへ落ちたらひとたまりもありません。だんなさんはむちゅうで馬をとめました。ところが、牛は、なんとしたことでしよう。とまらなかつたのです。ぜっぺきの奥底へと姿を消してしましました。びっくりしただんなさんは、馬からおりて、ぜっぺきのふちまで歩いていきました。のぞきこむと、下はまっ暗で何も見えません。だんなさんは、こぶしをふり上げながら、大声で叫びました。

「ざまあみやがれ。二度とそこから

出てくるなあー。」

それから馬にまた乗
って、ポクポク帰って
いきました。つかまえ
そこねたのは残念さんねんでし
たが、ぜっぺきから落
ちてしまったのです。
もう家の前をあらされ
る心配しんぱいありません。
だんなさんは大とくい
でおくさんに説明しま
した。そして、さいご



にこう言いました。

「わしはつかまえることができたんだ。なのに、馬のやつがのろまで追いつかなかったのさ。でも、まあ、つかまえたも同じことだ。」

そうして、すっかりまんぞくして床^{とこ}に入りました。

ところが、よく日、まえとそっくり同じ時間に、また、あの牛が家の前にあらわれたのです。だんなさんは、びっくりして、目を^めごしごしこすりました。自分の目が信じられなかったのです。けれども、それは、たしかにあの牛でした。だんなさんは、まっ赤になって叫びました。「今日こそつかまえてやる！ チューバ！ ボアドールをつれてこい！」

だんなさんは、こんどはボアドールに金のあぶみとくらをつけました。金でかざ

られたポアドールは、
きのうよりももったり
っぱに見えました。

そして、牛をつかま
えようと、はりきって、
はなをフーフーやって
いました。まえ足で土
をほって、いまにもか
け出しそうなようすで
す。そこへ、またおく
さんが出てきました。
「あなた、どこへ行く



んですか。」

「もう、おまえのいうことなんか、きいてられないんだ。わしはいそぐんだからな。」

だんなさんは、もどかしそうに答えました。

「神さまにまもられていらっしやいね。」

ところが、だんなさんは、このおくさんのやさしいことばに、耳をかそうともしません。

「ああ、神さまでも、あくまでもいいさ。とにかく、わしはつかまえてくるんだ。」

こう言って、馬にまたがりました。そうして、昨日よりもっとはげしいおいかけっこがはじまりました。走って、走って、山を登^{のぼ}ったりおりたり、とげとげの茂みをとびこえたり、道の石がけとばされて、あちこちにとびちります。だんなさんは、

「ほれ、もう少し、もう少し。」

と、かけ声をかけながら馬を走らせていきました。ところが、これ程^{ほど}がんばっているのに